

博士論文
【要約版】

中学生の本来感と学校適応感に関する研究

平成 31 年度
筑波大学大学院人間総合科学研究科

折笠国康

筑波大学

中学生の本来感と学校適応感に関する研究 要旨

本研究の目的は、中学生の本来感について、近接概念との差異や異動、特徴や発達、規定要因を明らかにし、中学生の本来感と学級適応感との関連について検討することであった。本研究により、本来感を育てる学校教育のあり方、本来感を包括した学校適応に関する実証的な研究を重ねることができれば、学校現場で起きている生徒指導上の問題の予防や改善に意味ある示唆が与えられると考えられた。そこで、本研究では、中学生の本来感についての実証的な検討を行った。

第1部「本来感と学級適応感の理論的検討」において、序章では、中学生の本来感と学校適応に焦点を当てることの重要性について述べ、現在中学校で問題となっている生徒指導上の諸問題の予防や解決にかかわり、本当の自尊感情として捉えることができる本来感を取り扱うことの意義について論じた。第1章では、本来感の近接概念に関する研究、学級適応感に関する研究を取り上げ、先行研究における問題点について論じ、第2章では、本研究の目的について論じられた。

第2部において、第3章では、中学生用の本来感尺度の1因子構造が確認され信頼性・妥当性が検討された。また、本来感の近接概念との関連と因子的弁別性についての示唆が得られた。第4章では、自己肯定感やコンピテンス等と深いかわりがあることや「自尊感情」との概念的な違いが示された。また、本来感は学級満足度における承認得点への有意な正の影響と侵害行為得点へ有意な負の影響が示され、本来感を高めることが中学生の学級適応の改善を可能にする変数であることが明らかになった。第5章では、本来感から3つの学校ストレス「教師無配慮」「友人侵害」「学業に対する自信の無さ」を媒介または直接的に、学校忌避的感情や関係性攻撃へと至る因果モデルを想定し検討した。その結果、本来感の学校ストレスに対する低減効果が確認され、学校ストレスの中でも、教師や友人との人間関係に関するストレスが特に学校忌避的感情に影響を与えることが確認された。本来感は、直接的に学校忌避的感情を低下させることが確認された。また、特徴的な結果として学校ストレスの中でも、「教師無配慮」が特に関係性攻撃に影響を与えることが確認された。

第3部において、第6章では、中学生の本来感と優越感の組み合わせ、本来感といい子傾向との組み合わせに着目し、本来感の発達や特性の変化について検討した。本来感と優越感の組み合わせの状態は学年による差が確認されず、優越感と本来感のどちらも高いことが適応的であるが、優越感が高くても本来感が低いと学校適応が低くなること、本来感と優越感がともに高い状態の特徴

として主張抑制の低さと他者迎合の高さが確認された。また、本来感と他者迎合の組み合わせの状態は学年による差は確認されず、学校適応感においては、他者迎合の高低よりも本来感の高さが被信頼・受容感の学校適応により関連することが確認された。第7章では、中学校生活の諸要因(友だちとのつきあい方、社会的スキル、居場所の心理的機能、教師に対する信頼感)が生徒の本来感に与える影響、いい子傾向が本来感に与える影響について検討した。その結果、防衛的な友だちとのつきあい方が本来感に負の影響を与えることが確認され、自己信頼と被愛願望の友だちとのつきあい方は本来感に正の影響を与えることが確認された。社会的スキルでは、主張的と共感・援助的が本来感に正の影響を与えることが確認され、主張的で他者に対して共感・援助的が本来感に正の影響を与えることが示された。居場所の心理的機能では、行動の自由と内省、被受容感のそれぞれが本来感に正の影響を与えることが確認された。教師に対する信頼感が本来感に与える影響では、安心感と役割を遂行することに基づく信頼感が本来感に正の影響を与えることが確認された。また、いい子傾向が本来感に与える影響では、主張抑制が本来感に負の影響を与えることが確認され、また他者迎合が本来感に正の影響を与えることが確認された。第8章では、中学校生活の諸要因(教師に対する信頼感、友だちとのつきあい方、居場所の心理的機能)が本来感に影響を与え、本来感が学校適応感にどのような影響を与えるのかについて検討した。さらに、本来感を含めた包括的な学校適応感に関するモデルを構築し、学校適応感に与える影響についてより詳しく検討した。教師に対する信頼感から本来感への影響は、安心感、役割遂行からの正の影響、不信からの負の影響が確認された。友だちとのつきあい方から本来感への影響は、自己信頼からの正の影響が確認され、防衛的、積極的相互理解、同調、被愛願望からの影響は確認されなかった。居場所の心理的機能から本来感への影響は、行動の自由と内省、被受容感からの正の影響が確認され、他者からの自由からの影響は確認されなかった。本来感が学校適応感に与える影響については、学校適応感のすべての因子に正の影響を与えていることが確認された。また、学校適応感に及ぼす影響を示すどの標準偏回帰係数よりも本来感からの影響が高いことが確認された。

第4部、第9章では、本研究の結果をまとめ、「学校現場では、教師は生徒の学校適応感を高めることより、生徒の本来感を高めることに主眼をおくことが結果的に中学生の学校適応感を高めることに貢献する。また、中学生の本来感を高めるには、主張的、共感・援助的な社会的スキルを提供し、行動の自由と内省、被受容感があり、思いを抑え込むことなく主張しながら、他者との関係を大切にするような学級を提供し、安心感があり役割を遂行していると認知される教師の存在が大切である。」といった教育実践への示唆を行った。最後に、

本研究における今後の課題や研究を発展させる方向性について示した。